

博士学位論文審査要旨

2022年1月15日

論文題目： 大学生による地域連携活動における学習効果と地域貢献

学位申請者： 曾 愉茜

審査委員：

主 査： 総合政策科学研究科 教授 武藏 勝宏

副 査： 総合政策科学研究科 教授 井口 貢

副 査： 総合政策科学研究科 教授 川井 圭司

要 旨：

本論文は、地域と学生の双方にメリットをもたらす「互恵性」に基づく大学生による地域連携活動を目指すために、地域連携活動の大学生側にもたらした学習効果とそれに影響する要因、地域側に与えた潜在的な影響を検討することを分析の課題として設定する。そのうえで、アメリカにおけるサービス・ラーニングの教育手法をベースに、本論文では、日本の大学における地域連携活動を「大学と地域の連携による地域課題への取り組みや支援を通じての福祉、教育、まちづくりなどの学習プロセス」と位置づけ、その意義と課題を日米中の比較研究や、具体的な大学生による地域連携活動のアンケート調査などによって明らかにするものである。

第1章では、研究の背景、目的、対象、研究の枠組みを示す。第2章では、大学生による地域連携活動が、近年重視されるようになった背景として、地域コミュニティの弱体化などの地域側のニーズと、大学側の地域貢献への取り組みや能動的学習の推進などの要因が一致したことを指摘する。そのうえで、両者を接合するためには、双方の「互酬的・互恵的な協力関係の構築」と「対等なパートナーとしての関係の構築」の重要性が強調される。第3章では、デューイの経験主義哲学やコルブの経験学習モデルなど、現在の体験型学習を裏付ける理論的系譜を整理し、経験学習の核心概念であるリフレクションに関する定義づけと、そうした経験学習の理論が戦後の日本の教育に及ぼした影響を分析する。第4章では、日米中における大学生の地域連携活動について、その発足の背景、政策・組織的な支援、活動の現状と特徴という三つの側面から比較調査を行う。地域社会が持っている教育力を活用し、大学教育の質の向上や地域・社会を担う人材の育成などの教育的目的を実現するという点で共通しているが、参加民主主義の伝統を有する米国や愛国主義教育の一環として展開される中国と比べて、日本では、大学教育の改革と密接に関連していることを指摘する。

第5章及び第6章では、大学生による地域連携活動の学習効果に関する実証研究をめぐる日米中の先行研究をレビューした上で、地域連携活動において大学生が獲得した学びの構造と影響要因をアンケートによって明らかにする。アンケートは、日中の大学生を対象に実施され、その分析結果から、地域連携活動への参加において、リフレクションを実施することが、学習効果に影響力を持っていることが示される。第7章では、都市部と農村部をフィールドとする大学生による地域連携活動に対するインタビューとゼミ生による報告論文を分析材料として、地域連携型プロジェクトを通じて獲得した学びの内容と学習者の変化・成長を析出する。第8章では、そうした大学生による地域連携活動が地域にもたらした効果を、受入側の地域住民やコーディネーターである大学側の指導者へのインタビューを通じて分析する。以上の分析を踏まえ、第9章では、大学生による地域連携活動がもたらした学習効果と地域貢献の役割を総括し、本研究の意義と今

後の展望を示す。

本論文は、大学生による地域連携活動の学習効果を検証することで、従来の経験学習やサービス・ラーニングの意義を再評価し、学習者の学びと地域貢献の双方における互恵的な関係の構築についての提言を試みており、その分析の対象となるサンプル数が限られているなどの課題はあるものの、体系的な先行研究がまだ不十分な大学生による地域連携活動のあり方に重要な知見を与えるものであることは疑いない。

よって、本論文は、博士（政策科学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2022年1月15日

論文題目： 大学生による地域連携活動における学習効果と地域貢献

学位申請者： 曾 愉茜

審査委員：

主 査： 総合政策科学研究科 教授 武藏 勝宏

副 査： 総合政策科学研究科 教授 井口 貢

副 査： 総合政策科学研究科 教授 川井 圭司

要 旨：

学位申請者に対する総合試験は、2022年1月15日午前10時30分から1時間にわたって、同志社大学志高館において実施された。審査委員からは、日米中の大学生の地域連携活動の相違点や、能動的学習とサービス・ラーニングとの関係、大学生の地域連携活動の教育的効果と地域側のメリットとの関係などについて質問があったが、学位申請者は研究結果から得られた専門的見地からの確に答えた。

語学試験(英語)については、多数の英語引用文献の適切な理解がなされていることを通じて、その運用能力を認めることができた。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 大学生による地域連携活動における学習効果と地域貢献

氏名： 曾 愉茜

要旨：

本研究は、地域と学生の双方にメリットをもたらす「互恵性」に基づく大学生による地域連携活動を目指すために、地域連携活動の大学生側にもたらした学習効果とそれに影響する要因、地域側に与えた潜在的な影響を検討することを目的とする。

本研究の分析対象は、大学生による地域連携活動の学習効果と地域効果を検討するものとして、大学生による地域連携活動そのものを研究対象として設定する。アメリカ、日本、中国における大学生による地域連携活動の類型化を行うにあたり、背景や政策及び活動の形式・テーマといった側面から、大学生による地域連携活動そのものの比較に重点を置いた。大学生による地域連携活動の学習効果に関する量的調査において、日本と中国における地域連携活動に参加経験のある大学生と経験のない学生両方を調査対象として設定した。また、大学生による地域連携活動の学習効果と地域貢献を検討する質的研究を行うにあたり、地域連携活動に関わってきた大学生を主な研究対象とし、それに加えて地域連携活動に関与した地域や受け入れ先の関係者も調査の対象とした。

本論文は、第1章から第9章で構成されている。第1章は、研究の背景、研究の目的と意義、分析の対象・方法など研究の枠組みを示す序論と位置付けた。

第2章「大学生による地域連携活動とは」では、近年の日本における学生による地域連携活動の活況の背景には、大学側の地域貢献のあり方の変容、大学教育における能動的学習の促進、少子高齢化による地域コミュニティの弱体化、住民やNPOなど多様な主体による公共的な活動の増加などの事情があることを示した。そのような背景と先行研究を踏まえて、活動の目的という視角から、大学生による地域連携活動とは何かについて定義し、主導者の違いにより大学生による地域連携活動を分類した。また、高等教育機関の地域連携活動の状況及び課題を把握するために実施した各省庁と地方自治体が行った公的統計調査を分析し、社会・地域連携活動を行う上で、高等教育機関が職員・教員不足、外部資金の不足などの課題に直面していることを明らかにした。最後に、連携活動をうまく継続させるためのポイントとして、地域側との「互酬的・互恵的な協力関係の構築」と「対等なパートナーとしての関係の構築」の2点の重要性を強調した。

第3章「体験型学習の理論系譜と動向」では、現在多様化しつつある体験型学習を裏付ける経験学習の理論的系譜を概略した。一口に経験学習の理論と言っても、その研究の蓄積は膨大なものであり、ここでは主として、経験学習の概念の淵源とみなされるジョン・デューイ (John Dewey) の経験主義哲学、1990年代以降日本と西欧を問わず関心を集めてきたデヴィッド・コルブ (David Kolb) の「経験学習モデル」理論、及び経験学習の核心概念である「リフレクション (reflection)」に関する研究を整理した。さらには、そのような経験学習の理論が戦後の日本にどのような影響を与え、そして教育界に取り入れられたのか、その歴史を振り返った。

第4章では、主として発足の背景、政策・組織的な支援、活動の現状と特徴という3つの側面からアメリカ、日本、中国における大学生の地域連携活動に関する比較調査を行った。経験学習の大国として、サービス・ラーニングを代表とする体験型学習の理論と実践が蓄積されてきたアメリカでは、参加民主主義の伝統を次世代の若者の意識に植え付けるためのサービス・ラーニン

グであったのに対して、日本における大学生の地域貢献型学習は大学教育改革の動きと密接に関係している。他方、中国では1980年代に独自の体験型学習である「大学生社会实践活动」が発足し、活動を通じて学生の愛国心と社会的責任感・道徳観を向上させるという愛国主義教育の一環として展開されている。地域社会が持っている教育力を活用し、大学教育の質の向上や地域・社会を担う人材の育成などの教育的目的を実現するという点で、三者は共通している。しかし、どのような人材像を目指して、地域貢献体験型学習を促進するのか、その教育の目標について、3カ国で相違点が存在することが伺えた。

第5章と第6章では、大学生による地域連携活動の学習効果に関する実証研究をめぐるアメリカ、日本、中国の先行研究をレビューした上で、地域連携活動において大学生が獲得した学びの構造と影響要因を明らかにするためにアンケートを実施した。アンケートは、日本と中国の大学生を対象に、2020年と2021年の2回に分けて行った。第1回目の調査の目的は日本と中国における地域連携活動に参加した大学生の参加像の類型化にあり、主に正課教育の一環として取り入れられる日本における大学生の地域貢献型学習と正課外教育活動という形で定着している中国の大学生社会实践活动における両国の学生の関わり方と学習効果を比較した。アンケートの分析結果から、地域連携活動の参加動機、参加の仕方、学びの構造といった面で、両国の大学生の特徴を明らかにした。

第2回目の調査では地域連携活動の「参加経験の有無」と大学生の「社会貢献意識」、「参加への仕方」と大学生の学びとの間に、関係性があるのかを検証した。分析結果の精度と正確さを向上させるために、第1回目と第2回目で得られた日本の大学生のデータをもとに、「地域連携活動への参加の仕方」と「地域連携活動の学習効果」に関する項目の因子分析を行なった。「地域連携活動への参加の仕方」を説明変数とし、「地域連携活動の学習効果」を被説明変数とする重回帰分析を行なった結果、「課題対応力」、「自己効力感」、「社会・自己認識」、「学業に関わる能力」の4つの学習効果に対して、「内省」はある程度の影響力を持っていることが見出された。このことは学習効果を高めることができることを示した先行研究と一致している。さらに、今回の結果から、「他者との関わり」は「課題対応力」、「自己効力感」、「社会・自己認識」の3つの学習効果に対して影響力を持つことが示唆された。

第7章「大学生による地域連携活動の学習効果に関する質的分析」では、都市部と農村部をフィールドとする対照的な二つの事例に焦点を当て、地域連携活動に参加した経験がある大学生に対するインタビューとゼミ生が作成した論文を分析材料として、大学生による地域連携活動の参加者自身の視点から、大学生が活動を通じて学んできたことや地域活動に対する感想と反省を分析した。質的分析を通じて、まちづくりをテーマとするゼミナールの地域連携型プロジェクトを通じて獲得した学びを析出し、「人との関係を作る能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」などの「基礎的・汎用的能力」、「教養・スキル」、「社会理解」において学生の能力が向上したと確認できた。さらに、農村部をフィールドとするゼミナールのゼミ生を対象にインタビュー調査を実施し、地域活動を通じて、ゼミ生が「コミュニケーション力」、「協調性」、「人との接し方」、「プロジェクトに必要な知識・教養」の6つの面で変化・成長したことを確認できた。

第8章「大学生による地域連携活動の地域効果と影響に関する質的分析」では、地域貢献の一環としての大学生による地域連携活動の地域に及ぼす効果を質的研究方法で検討した。大学生による地域連携活動によって地域にもたらされる効果は、受入側の地域と地域住民、また活動実施者である大学生双方を調査対象とすることで明らかにした。学生の記述と他者の評価を照合し、外部者視点から地域魅力の再発見、住民と学生の共同成长、住民の地域参加のきっかけ作りや参加意欲の喚起といった新しい担い手の発掘につながる効果の4つの効果について、ゼミ生と受け入れ先が共感していたことが確認できた。また、地域での活動の経験は大学の授業に役立ったことについてもゼミ生に尋ね、このアカデミックな面でのゼミ生の学びを「主体的学習の仕方」、

「文書作成」、「論理的な思考」の3つのグループに集約できた。

第9章では、今まで明らかにされた研究結果を結論として集約し、本研究の到達点と意義を明記した。本研究の到達点として、本研究は、理論系譜の整理、国際比較、文献調査といった研究手法を活用し、大学生による地域連携活動の概念、背景、課題、特徴を明らかにし、大学生による地域連携活動をスムーズに継続させるための提言を試みた。また、アンケート調査の結果に対する因子分析と重回帰分析を行い、地域連携活動における大学生の学びの特徴とそれに影響する要因を検討した。分析結果から、大学生の学習効果を向上させるための条件を抽出した。質的調査で、都市部と農村部における大学生による地域連携活動の比較に着目し、事例研究と質的分析を通じて、異なるタイプのフィールドで地域連携活動を行った学生の学びと地域貢献の相違を明らかにし、その原因を分析した。さらに、学生と受け入れ先側双方から、大学生による地域連携活動のメリットと意義を把握した。

最後に、本研究の限界にも言及し、今後の課題として、より正確な分析結果を導くための多様なサンプルの確保、サークル活動などの正課外活動として展開している大学生による地域連携活動に対する研究の必要性、またポスト・コロナにおける地域連携型PBLの視点から対面とオンライン・リモートの双方を活用する教育方法の研究をあげ、こうした新たな研究課題に取り組むことを述べて本稿を締めくくった。

(3893 文字)